



Title	ネルゾンの播いた種
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 2002, 10, p. 25-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9140
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ネルゾンの播いた種

バーミンガムに集まったソクラテス者たち

寺田俊郎

パート A

7月29日(月)

1. 基調講演: トーマス・マイアー「グローバリゼーションの時代における民主主義の刷新」

要点だけ言うと、グローバリゼーションの時代においても、あるいはそれだからこそ、価値観の構築が重要であり、価値観の構築には顔の見える対話が必要であるが、顔の見える対話の最も理想的な形態はソクラティック・ダイアログである、ということになる。質疑で最も印象に残るのは、次の二つである。(1) 問題は個々人の価値観ではなくシステムではないのか。(2) 宗教間の対話を考慮に入れることが重要ではないのか。

(1) の質問は、こんな講演があるのならこの学会の出席をキャンセルしたいくらいだという挑戦的な言葉で始まった。たとえば、環境をまもらなければならないという価値観では、多くの人的一致している。問題は、社会のシステムとしてそれができないことにある、と。マイアーの答えのポイントは、私には掴めなかった。

(2) の論点について、マイアーは、た

とえば日本でアジア地域の人々と会合をもったとき、基本的な政治的価値について宗教抜きで論じあえた経験を引合いに出して答えていた。私の感想としては、ソクラティック・ダイアログが公共の場での言論を通じて価値を探究するという側面をもちうることは確かだが、それを政治状況と直接結びつけようとするマイアーの議論には、まったく共感できない。後で個人的に質問したところ、マイアーは自分自身ではソクラティック・ダイアログをファシリテートすることはないそうだ。PPAは政治部門とSD部門とに分かれていて、自分は政治部門にもっぱら携っているということだ。彼の中では、政治とソクラティック・ダイアログは事実として分裂していながら、理念として結合しているように感じた。ネルゾンの伝統そのままに(ネルズンは自分の弟子たちに社会民主党かさもなくば共産党に入党することを命じていた)マイアーはドイツ社民党の幹部であるが、残念ながらその事実由来する固定的な図式というか、哲学的に自由でない発想を感じた。

2. ワークショップ：ドロシー・モア & ギーゼラ・ラウパハ＝シュトレ「利他主義、倫理、報い、報酬：第三セクターの葛藤」

「第三セクター」というのは、ここでは、政府と企業（市場）の間という意味では、日本でいう「第三セクター」と同じだが、具体的には市民のボランティア活動を指す。今回の総合テーマの一つである。

ワークショップでは、まず、導入として、参加者各人のボランティア経験を発表することが求められ、何人かが経験を語った（テーマに直接関係なさそうな話が多い。事前にレジュメを読んでいないのか、それとも英語を母語としない人が多いからか。）その後で、ボランティアとそれに対する報酬をめぐる、イギリスの例とドイツの例が紹介された。イギリスの例では、有給の職員とボランティアの扱いの差が焦点となり、ドイツの例では、ソクラティック・ダイアログのファシリテータが伝統的にボランティアであったことが強調された。残念ながら、ボランティア活動と報酬というもっとも重要な問題には深入りせず、次のゲームに移っていった。（作業を少し詰め込み過ぎ。）そのゲームとは、一人一人に片手一杯のコインが配られ、そのコインを自分の好きなように参加者に分配し、さらに一人一人からコインを自分の好きなようにもらうというものである。お金を受け取る人々の態度には様々な態度があり、お金をもらうより与えることに喜びを感じる人々がずっと多いといったことを実感するためのゲームだったようだが、あまり面白いとは思えなかった。

3. ペーパー：本間直樹 & 堀江剛：「ソクラティック・ダイアログにおける偶然性と必然性」

聴衆が多く、発表者の二人は緊張していたように見えたが、よく準備された資料を使って整然と進められた。タイトルが抽象的で、討論しにくいのではないかと心配していたが、ドリース・ボエレの核心をついた質問を皮切りに、活発な議論が起こり、たいへん面白かった。

最も印象に残った議論は、発表者の用意した資料を短い時間の間に分析した参加者が提起したもので、そこに載せられている対話の連鎖が一定の必然性をもっているように見えるのは、実は日本的な規範を背景にしているからではないか、というものだった。実はこの問を私は瞬時には理解できず、不毛な文化論に陥る悪しき問いと勘違いして不用意な反論をしてしまったが、後で冷静に考えてみるとSDの本質に関わる問いである。すなわち、SDで遡及的抽象によって明るみに出されるのは、実は多くの場合偶然的な判断や価値でしかないのではないかと、そして、それに気づくことがソクラティック・ダイアログのいいところではないか、ということである。そうすると、逆に、ソクラティック・ダイアログにおける「必然性」とは何かということになる。硬派のドイツ人の中には、「必然性とは他に可能性がないということだ。言葉を厳密に使うべきだ。」などと不満を述べる人もあったが、事柄の本質を見ない批評であろう。

とにかくいいセッションで、最終日に論文発表を控えた私は大いにプレッシャーを感じ、発表が終わるまであまり夕方のビールを楽しむことができなかった。

4. ワークショップ：ゲール・ブラウダ & ピーター・リックマン「公共のための哲学：哲学における対話の批判 - - ワークショップの方法を用いて」

すっかり顔なじみになったフランスのプラクティショナー、ブラウダが、哲学カフェ形式で行ったセッション。といっても、ただのフリーディスカッションで、あえて哲学カフェ形式を強調する意味はあったのだろうか。

面白かったのは、リックマンの主張、「哲学の形式は対話だけでなく体系でもある」である。対話は哲学の重要な形式だが、体系という形式ももたねばならないということを、プラトンが「国家」で対話のみならず体系的叙述という形式をとったことを引き合いに出して力説していた。古風なプロフェッサーの風格がにじみ出ていて興味深かったが、いろいろ疑問を感じて質問してみた。哲学カフェのような対話をどう評価するのか？体系の多様性は認めるのか？ - - 答えは、対話も哲学の形式である、ただ、そこで留めておくべきではない、また、体系は哲学する一人一人がつくればよい。その他、哲学者の社会的役割が主なディスカッションのテーマになった。

7月30日（火）

1. 基調講演：ピーター・リックマン「公民社会と自由」 & ウ・ゴ・ヴライサヴリエリッチ「科学的イデオロギーの終焉と大学の再社会化」

リックマン曰く「大学教授は学会に出かける。そして、たとえばヴェニスのようなすてきなところで、旧交を温めたり、

討論をしたり、性的な冒険をしたりする。」要は学問の自由（大学の自由）は大切だということだが、これはご愛嬌である。印象に残ったのは、司会のベアーテ・リティヒ（昨年大阪に来た）の 'civil society' と 'civic society' の違いに関する見解である。'civic society' は個人の権利を基底とする社会であり、ロッキ的な自由主義の社会であるのに対して、'civil society' は個人の権利の擁護だけでなく、個人の自発的な社会参加をも含めた広い概念である、ヨーロッパの議論ではそうになっている、とリティヒは説明した。

私は逆の理解をしていた。civil societyの方が国家の権力から個人の権利を擁護するというニュアンスが強く、civic societyの方が、公民的な徳を備えた個人が理性の公的使用を通じて社会構築に参加するというニュアンスをもっていると思っていたのである。（ここまでの記述も、'civil society' を「市民社会」、'civic society' を「公民社会」という風に区別して表記している。）今回の学会のテーマに、civil societyではなく敢てcivic societyが用いられていたのも、そのためだと理解していた。第3セクターつまりNPOなどの自発的活動が構成する公民社会。だが、今回のテーマも、リティヒに言わせれば、主催者が概念の区別は無頓着なために曖昧なテーマになっているに過ぎない。しかし、civil/civic societyの理解はこれでいいか？

2. ワークショップ：ケレム・アクバス & サビル・ユセソイ「イスラムと共同体における他者との対話」

中止になった。イスラム圏でSDをやる

うとしているトルコ人のワークショップだったので、大変楽しみにしていた。残念だった。

3. ペーパー：ギーゼラ・ラウパハ＝シュトレ「公民社会における民主主義的な目標に対するソクラティック・ダイアローグの寄与」

ヘックマンに直接教えを受け、ネルゾンの伝統にも造詣が深いラウパハ＝シュトレの発表を、一度聞いておきたかった。

発表の主旨は、ソクラティック・ダイアローグは、常に民主主義的な社会の構築と密接に結びついていた、ということである。しかし、話を聞く限り、その結びつきは事実的な結びつきであり、決して内的な連関ではない。そして、その事実的な結びつきは、ネルゾンの個人的信念によってつくられたものだ。たとえばナチスに対してどのように対処するかというような政治的問題についてSDを行い、結論を出していたというが、それは、ネルゾンが政治にコミットしなければならないという個人的な信念をもっていたからである。しかも、すでに述べたように、社会民主党か共産党かという極端な選択を弟子たちに突きつけていたのだ。そして、そのような事実的な政治への強い志向があったからこそ、SDは今日まで生き残ったのだともいえる。哲学的対話の方法として、というよりも。そのことは、たとえばネルゾンの学校で学んだ人々とSDをしているとよく分かる。彼女ら(女性しか生き残っていない)の発言は、往々にして、個人的な意見というより、社会民主主義の立場から見た状況の解釈である。

というわけで、ネルゾン学派と政治と

の連関に関する歴史的事情は学べたが、SDと民主主義、政治、公共圏との内的連関については考えは進まなかった。したがって、感想としては初日のマイアーの基調講演と同じようなものである。最後に堀江さんがラウパハ＝シュトレに問うた「政治教育はSDではカバーできない領域を含むのではないか？」は今から思えば当然の問いであった。

7月31日(水)

1. 基調講演：フェルナンド・レアル「倫理、経済、第三セクター」

主旨は、第三セクターは倫理的にまっとうな意図をもっていればそれでよしというわけではなく、経済の世界のようにそれなりの結果を出さなければならない、というもの。質疑は、自分の発表の準備のため欠席した。

2. ペーパー：拙論「日本の公民社会においてソクラティック・ダイアローグはどのように機能しうるか？」

本間さんや堀江さんほどSDの経験がないので、今まで私が経験した数回のSDと教室で学生たちと試みたSDとをともに、SDが公共の場での対話の姿勢を培う道具として有効であることを主張し、さらに、「合意」について思弁を展開した。「合意」は、(1)対話が真理の探究であることに関するいわばメタ合意、(2)対話の内容に関する合意、(3)対話の進行に関する合意、これら三つに分けて考えなければならない。

(1)は不可欠であり、(3)は自律的な志向の訓練のために重要であるが、(2)は必ずしも必要ではない。参加者の意見、ものの見方、志向のパラダイムな

どの相違がはっきりしさえすれば、その相違を保ったまま対話を続けていくことはできる。たとえ事実的な合意に至ったとしても、それが仮説に過ぎないことを銘記することが大切である。質疑は活発かつ好意的であり、合意の問題について反応もあって嬉しかったが、ほとんどのやりとりが文化論に終始してしまったことは、少し残念だった。国際学会だから、それはそれでいいのかもしれないが。

司会のイダ・ジョングスマは1999年のオクスフォード以来の知り合いであり、朗らかにかつ注意深くセッションを取り仕切ってくれて助かった。ネルゾン批判を少し織りませたのだが、後で堀江さん & 本間さんのセッションの司会をしていたキース・ハモンドが、一緒に聞いていた同僚と思わず顔を見合わせたといっていた。ネルゾンの信奉者がいるところではやってはいけないことのようなのだ。

パート B

7月31日(水)～8月1日(木)

2日間のソクラティック・ダイアログ：はじめはリーニ・サランの「他者に対する責任に限界はあるか」に出ていたのだが、ディータ・クローン & キルステン・マルムクウィストの「ソクラティック・ファシリテーション入門」に移った。

はじめはファシリテータ修行中の人のみを対象とするものと勘違いして、興味を引かれつつ敬遠していたのだが、誰でも参加できることが分かり、しかも、日本の同僚が誰も参加していないことに気づいたので、急遽サランの了解をとって変更した。クローンとマルムクウィストに、このセッションは我々にとってとても大事

なので、途中ではあるが入れてもらいたい旨伝えと、ちょうどあなたの発表から生じた問いをめぐって話し合っていたところなので、あなたはもうこのセッションの一部だと言われて、面くらった。私が逸した最初の一時間のあいだ、参加者はSDに関する様々な疑問を紙に書いてはり出し、ファシリテータの二人がそれに答えるということをやっていたようだ。

私の発表から生じた問いとは、おそらく「ソクラティック・ダイアログにおいて合意と真理との間には必然的な関係はあるのか？あるとすれば、それは何か？」というものだ。そこに貼り出された問いは、まさに我々が日本でSDをやろうとして感じることに大きく重なっていた。ファシリテータは対話に介入してはいけないのか、いつ、どこまで介入していいのか、例は一つでなければいけないのか、哲学書の一節を導入にしていけないのか、SDファシリテータのどこがソクラテス的なのか、云々。遅刻した私が聞くことができたのは、クローンが「ファシリテータはただ交通整理のためにそこに立っているわけではない」という答えだ。おそらく、質問はファシリテータの介入に関するものだろう。

ファシリテータはSDを支配しはしないが、当然ある程度のコントロールをする。それは「舵取り(steering)ではない」と繰り返しいていたのは、対話の方向づけをするわけではないということだろうが、やはり、要所要所である方向を念頭において舵取りをするのではないか。そこで引合いに出されていたのは、おそらく中岡先生の発表で出された日本人学生の事例であった。中岡先生の発表は、

すでに参加者たちがそれに拠って議論をするところの共有財産になっていたわけである。「動物をただ面白いからといって殺すことは別に悪いことではない」という結論に誰も異議を唱えなかった場合どうするか、という事例である。クローンの答えは、もう一度考え直すように促すことはできるというものだった。それでも結論が変わらなかつたら？それはどうすることもできない。

続いて、ヘックマンの「6つの教育的方策」が紹介された。

1、(ファシリテータ/テュータ)は、検討される事柄について個人的な意見を開示しないことによって、参加者自身の注意を、彼ら自身の推論する能力に向けなければならない。

2、テュータは、学生が具体的な現実にしっかり根をおろすようにさせなければならない。そして、一般的な洞察へと進んでいく間、常に具体的なものへのかわりに意識し続けるよう、注意を払わなければならない。

3、討議を明晰な思考の助けとして目一杯活用せよ。

4、目下検討されている事柄に焦点を合わせること。

5、構成。テュータが討議を生産的な道具になるよう舵取りをすることは、構成の一部である。

続いて、SDの実演をするグループと観察するグループとに分かれて、「寛容の限界はどこにあるか？ What is the limits of tolerance?」というテーマで対話が行われた。ファシリテータはクローン。クローンは、間の取りかたがうまい。また、もちろん時間節約のためだが、例の中のこ

の文に注目してみてもどうか、という提案も行う。途中で中断して観察披露と質疑応答。いろいろあったが、三つだけあげておくと、(1)何を書き留めるかはどいうやってきめるのか？ - - 合意形成に必要なステップを書き留める。(2)ファシリテータの提案はやはり操作ではないか？あるいは「インプット」ではないか？ - - それはあくまで「形式」面であって「内容」面ではない。(3)英語が母語でないことはコミュニケーションにどのように影響するか？(3)の質問にはやはり意気消沈させられた。英語を母語とする人から見れば、変な英語が飛び交う対話ではあつただろうが、私の目には、英語を母語としない人々が行う対話としては、コミュニケーションは申し分なく成り立っていた。それほど高い要求がなされるとすれば、私は英語でのSDにはとても参加できない。

途中で、参加者の一人がファシリテータをやってみたいと言い出して、クローンと交代した。進取の精神を誉める声や、別の角度から観察する機会になったと評価する声もあったが、私は、混乱を招いただけだと思う。もう少しクローンの進行で対話が進むのを観察していたかった。そう本人に告げる勇気はなかったが。

セッションの終わりに再び最初に貼り出した問いに帰っていった。我々にとってヒントとなるが多かったので、やや詳しく書き留めておく。

(1) SDをどのように終了するか？ - - 30分ほど自由に話し合う。ファシリテータに「答え」(！)を聞くこともある。(2)例は一つしかダメなのか？ - - ヘックマンは複数の例を認めていた。

(3) SD をどのように学校に応用するか? - - 週末に有志を集めて行うこともあるし、「プロジェクト週間」(ドイツの「総合学習」のようなものか?)に行うこともある。生徒は興味をもつ。 - - これに対して、参加者からは、生徒の自尊心を育てるのに有効だとの声。(これには私も同感。)また、クローンは、テーマについてよく知ることの必要性に言及した。テーマについてよく知らないと、狭い方向づけをする怖れがあるからだ。そこで、事前にブレインストーミングをすることもあると言う。(やはりファシリテータは内容にかかわるのではないか!)

(4) みんなが理解できる哲学のテキストは出発点にならないのか? - - 具体例に戻することを条件に、それもよい。このテキストに関わる具体例は何か?を大切にする。では、新聞記事ではどうか? - - 新聞記事では、その事件についての経験を探究できない。個人の経験を探究することはとても大切。

(5) 介入はどこまで許されるか? - - グループがうまく進んでいける助けになる範囲で。

(6) SD に適した問いは何か? - - 哲学的な問いか数学的な問いのみ。心理学的な問いはよくない。

(7) 対話の内容を外部に話してもよいか? - - よい。
なかなか有意義なセッションだった。

次の「1日で行うSD」として、ライナー・ロスカとメヒトヒルド・ゴルトシュタインの「公的生活に参加する義務はあるか?」に参加した。ダイアローグ

は様々な理由でうまくいかず、残念だった。

学会終了後、スコットランドへ小旅行した。テーマは「スコットランドの啓蒙」。グラスゴー大学図書館にも、エディンバラ大学図書館にも、残念ながらスミスやヒュームの常設展示や特設蔵書はなかったが、ハモンドが教えてくれた、グラスゴーでスミスの後任だった哲学者ジャーディーンの「哲学教育のアウトライン」(エディンバラ大学図書館の貴重本コーナーにあった)を調べることができた。また、スコットランド哲学のドイツでの受容に関するアンソロジー(ヒュームやスミスやリードのドイツ語訳の選集)も見つけた。(マールブルク大学出身の比較的若いカント学者ハイナー・クレメの編集だから別にスコットランドでなければ見られないものでもないが、その存在がわかってよかった。)グラスゴー大学の書店で Why Scottish Philosophy Matters という本を買って、エディンバラから北海を眺めつつロンドンへ向かう列車の中で読んだ。「スコットランドの哲学」といえる伝統がたしかに存在するという主旨だが、やはりその記述はドゥンス=スコトゥスから始まる。「鋭利博士」とあだ名され、その名にスコットランド出身であることが記されているこの高名な哲学者のことを、スコットランドを歩き回っている間すっかり忘れていた。恥ずかしい。

(てらだとしろう)